

概 要 報 告

実施期日	7月28日(火)【午後】
部 会 名	小学校 総則部会

テーマ 『地域協働カリキュラムを創る ～児童の主体的な学びを深めるために～』

提案概要

①学習指導要領の内容を踏まえた特色ある教育課程の編成の工夫・改善

提案校が所在する地域では、かつては商店街を中心とした地域コミュニティが成立していたが、近年では高層住宅や大型店舗が次々と建設され、住民の生活スタイルや地域のつながりの様態が変わりつつある。児童の多くも大型店舗で買い物をしており、商店街は通学路になっているものの、買い物に利用する機会はあまりない。どのような商店があるのかよく知らない児童も多い。その一方で、古くからの地元住民のつながりも残っている。児童が地域ボランティアに通学時の安全を見守ってもらったり、地域の祭りやイベントに参加したりといったかかわりがまだ多くある。

児童が興味・関心をもった課題について、活動の場を地域にまで広げていけるようなカリキュラムを開発し、地域の貴重な人的・物的資源を生かしながら児童の学びの質を高めていく活動に取り組んだ。

【地域協働カリキュラム作りのポイント】

- ①児童の実態や課題意識からスタートする
- ②決め事をつくらず、できることに無理せず取り組む
- ③学びの流れやつながりを意識する
- ④取組やかかわりを継続する
- ⑤地域コーディネーターと連携する

【実践の概要】

○「商店街」や公共施設との協働プロジェクト

- ・商店とのコラボレーションによる出店プロジェクト（土曜参観日に学校で開催→平日に商店街駐車場で開催）
- ・フラワーロードプロジェクト（出店の売り上げで花の苗を買い、商店街の道路沿いに植える）
- ・C-mapプロジェクト（店舗や公共施設を紹介した巨大学区地図をつくり、商店街などに掲示）
- ・お祭り出店プロジェクト（商店街の夏祭りにお店を出す）
- ・青少年会館・コミュニティーセンター主催のイベントへの参加（自作劇の上演、合奏やダンスの披露）

○地域の人材を活用した学習活動

- ・醤油作り（保護者や地域の搾り師に指導協力を仰ぎ、醤油を手作り→給食で使用）
- ・米づくり（地域の米店や農家に指導協力を仰ぎ、校地内に水田をつくってもち米を栽培→もちをつき販売）

【成果と課題】

○成果

- ・商店主や職人、農家など、地域の「本物の力」に触れ、児童が地域を見つめ直すことができた。
- ・地域の方とかかわりながら問題解決的な学習を行うことを通して、児童のコミュニケーション能力や、主体的に課題を解決しようとする力が育った。
- ・地域の方からも活動を評価してもらうことにより、児童が自信をもって活動し、充実感や達成感を得ることができた。また、児童の新たな活動への意欲が高まった。
- ・児童の活動のために複数の団体が協力体制をとるなど、地域コミュニティに変化の兆しがみられた。

○課題

- ・児童の学びをつなげ、深めるために、活動に即した各教科等との関連づけをどう図っていくか。
- ・学校全体で日常的・継続的に取り組んでいける地域協働カリキュラムをどのようにつくっていくか。

(児童の活動状況に応じた、地域の方との「適時適材適所」のかかわり、地域コーディネーターとの連携等)

質疑概要

Q：児童との交流で商店街が何か変わったことはあったか。

A：児童とコラボレーションしてお店を出す経験から学んだノウハウを生かして、朝市に出店するなど新たな取組を始める商店もあった。

Q：総合的な学習の時間として取り組んでいるが、他教科と関連づけて行った場合の評価の仕方はどのようにしたか。

A：レポートなどは、他教科でも評価した。

研究協議概要

協議の柱：児童の主体的・自発的な学習が促されるような学校として取り組んでいる地域協働カリキュラムについて7グループに別れ、提示された協議の柱について、情報交換や意見交換を行った。グループ協議後、グループごとに話し合った内容について全体に発表した。

○児童が住む身近な地域の環境を活用することが、学習をより主体的に行うきっかけとなる。

○同じ活動を長く続けていると、児童の実態に合わなくなることもある。学年で取り組んだことを他学年にも伝え、「自分たちもやってみたい」と思わせるような手立てを取っていかねばいけない。

○児童と地域の願いを一致させるために、まずは、教師が地域を知ることが大切である。

○地域の人たちとの関係性を良好に保つことが大切である。地域と学校の温度差をなくすようにしなければならない。

○子どもたちの自発性を大事にするのであれば、教師がその思いをどのように見取るかが重要。またそれを教師間で共有しなければならない。この先生だからできたという活動では長続きしない。上手くいった活動を全体で振り返り共有することで、長く続く活動になるのではないか。

○待っているだけではなかなか地域とのつながりはできない。まずは教師が外に出て、気軽に地域とかかわっていくことが大切ではないか。

○児童のモチベーションを保つためには、常に活動を振り返りながら児童の実態に合わせた自発的な活動を設定していく必要がある。

まとめ概要

○地域の活用は、学習の目的を達成するための手段であり、児童の自主的・自発的な学習が促されることが大切。

○児童の主体的な学びを深めるということを、学校の第一のスタンスとして取り組んだことが良かった。

○活動の中に様々なエキスが詰め込まれていた。

○「決め事を作らない」という決め事が、教師のモチベーションを高めたのではないか。

○教師による活動のデザインにより、児童のモチベーションが高まった。

○発達段階に即しており、活動の出口が明確だったため児童が見通しをもって学習に取り組むことができた。

○教師が講師を頼れる状況が、児童のコミュニケーションの良い見本になった。

○地域コーディネーターを上手く活用できていた。

○教科との系統性があったので、学習が充実した。

○児童が、地域から支えられていると実感できるよう、上手く教師が導いていた。

○日頃から教師が児童の思いを汲み取り、信頼関係を築けていたことが良い結果につながった。

○いい地域には、いい学校がある。

○地域は、学びの最後のセーフティネットと言われる。

○教育課程の編成においては、学校の主体性を発揮する必要がある。

○地域という大きな教育資源を学校の中で生かしていかなければならない。

○教育ビジョンを学校全体で共有できていた。

○「チーム学校」として一枚岩となり学習活動に取り組んでいく必要がある。